

大規模な雨水貯留管

千葉駅の東側、オフィスビルや飲食店が立ち並ぶ中心市街地の中を葭川（よしかわ）が流れている。この川の周辺は、大雨により過去に度々浸水被害を受けてきたため、昭和 62 年から時間雨量 50 mm に対応できるように改修工事と貯留管の整備が行われ、平成 12～24 年にかけて『中央雨水 1 号貯留幹線』が整備された。この幹線の貯留量は 8 万トンにも及ぶもので、千葉みなと駅近くにある中央雨水ポンプ場から東京湾へ排水される。この幹線の整備により、近年、葭川周辺での大きな浸水被害は発生していない。

雨水対策重点地区整備基本方針

千葉市では千葉駅周辺以外でも度々、浸水被害が発生しており対策が進められてきたが、近年、ゲリラ豪雨に対して、既存の排水施設だけでは対応が難しくなっているという。そこで、昨年（平成 29 年）8 月に『千葉市雨水対策重点地区整備基本方針』が策定された。同方針は、市街化区域 14,668ha（279 地区）について 1 時間当たり 65.1 mm の降雨による浸水シミュレーションによるリスク評価を行った。その結果、浸水リスクが高く、かつ都市機能集積度が高い 13 地区を重点地区として、他の地区は一般地区として区分。重点地区においては、整備水準を従来の 53.4mm/h から 65.1mm/h に引き上げ、平成 30 年度～49 年度の 20 年間の計画期間として対策事業を行うことにしたという。

地域住民の自助活動支援策

ハードの整備が着々と進む一方で、地域住民の自助活動を支援する取り組みも行われている。防水板を設置し浸水対策をしようとする市民を対象にした助成事業である。しかし、助成制度の利用は決して多くはないという。利用を促すべく PR などに努めているが、工事費の半分は自己負担であり、個人にとってはまとまった金額である。市民の中にもいろいろな考え方があ。市民にとって本当に利用したいときに利用できる制度があることが大事である。

大雨対策に関わる場所を訪ねる

千葉市役所から徒歩で 15 分。千葉みなと駅のすぐそばに中央雨水ポンプ場がある。8 万トンにも及ぶ貯留管の排水を担うポンプを納めるだけあり建屋は大きく、一瞬、工場か学校かと思ましがうほどだ。次に千葉駅へ。JR 千葉駅と京成千葉駅の間にある冠水箇所を訪ねた。初夏の青空が広がる穏やかに日のせいか、大雨が降ると 70 cm も冠水するとは信じられないが、よく観察すれば周囲よりも低くなっている。さらに葭川周辺へ。周辺はビル街。上空には都市モノレールが走る独特の景観が広がっている。そういった景観を見まわしているうちに護岸に千葉駅周辺の雨水を集め流す管路からの吐出口があった。

賑わう繁華街、静かなオフィス街。しかし、ひとたび大雨が襲うとその賑わいや、静かな環境が一変する。そのリスクを軽減するための施設が人知れず存在している。千葉市担当者の「いつ起こるか分からないことへの備えとして、まとまった金額を使うことに躊躇される方も少なくない。市民の皆様の中にもいろいろな考え方が」という言葉を思い出す。浸水対策の難しさを思った。



左から、中央雨水ポンプ場、千葉駅の冠水箇所、葭川への吐出口